



THE ROTARY CLUB OF HIROSHIMA HATSUKAICHI

広島廿日市ロータリークラブ 会報

2013年
11・12月
No.387



◆◆ 本年度会長方針 ◆◆

「和のこころをつなげよう」

例会日 / 毎週月曜日 12:30 ~ 13:30
例会場 / 広島サンプラザ TEL (082) 278-5000
会 長 / 久保田 幸恵 幹事 / 松野 正信

事務局

〒738-0015 広島県廿日市市本町5番1号
廿日市市商工保健会館4F
TEL (0829) 31-5490 FAX (0829) 31-5491
E-mail / office20@h-hrc.com
URL / http://www.h-hrc.com/

第794回 ANAクラウンプラザホテル広島 2013年11月8日

西 RC・西南 RC・廿日市 RC 3クラブ合同夜間例会



第795回 広島サンプラザ 2013年11月18日

会長時間

命の恩人

森井 紀夫 会員

1947年7才の私は、母と弟(3才)の三人で終戦後の中国、安東(現丹東)から民間人の引揚団に入り、北朝鮮から38度線を渡り、韓国を経由して博多港に帰国することができました。

帰国に際しては、新調の子供服・リュックサック・靴をはいて、夕方に集合場所に行きました。漁船の船





底に20人位が座って暗闇で雷雨の中、木葉のように揺れ、揺れも強くなりだしたとき、念仏と合掌となりました。念仏の効果か静かになり、無事危機を脱することができました。

北朝鮮に着いて、引揚団4～50名で歩くのですが、弟はハイキング気分です。途中、虫を追いかけたり、花を取ったりで、だんだん団体から遅れていき、結局夜道を迷子状態で歩いていました。周りは暗闇で3人も無口で歩くだけでした。もう駄目かなと思っているとき、遠くの方から、灯りと「森井さん、森井さん」と呼ぶ声が聞こえてきました。団長さんら3名が探しにこられ、顔を見てほっとして腰抜け状態でした。引揚団の方々は、お寺のお堂で休んでいました。3人の寝る場所は本尊の左手横の一段と高いところしか空いてなく、仏様に抱かれているようでした。翌日からは、弟も懲りたのか遊ばずに歩いていました。残留孤児にならないで良かった。

恩人の団長さんは、家内の母の友人のご主人で、30年経っても、迷子を探した私たちのことを度々話されるそうです。家内と会わなければ、忘れていたかもしれません。

まさに、団長さんは命の恩人でした。

20年前、この話を昏睡状態の母の横で弟と会話していると寝ている母が突然、手を上げたので、一緒に話したいのかと聞くと頷いていました。当時のことを母も思い出したのでしょう。数日後、他界しました。昏睡時、枕許での話はしない方が良くも。

卓話

11月はロータリー財団月間です
ロータリー財団理事 松本 猛 会員

私が感じた
小さな優しさ体験談
上杉 昌幸 会員



職場訪問例会

NPO 法人
高次脳機能障害サポートネットひろしま
広島市安佐南区上安2丁目30-15



パンフレット作成費寄付の目録贈呈





第798回 広島サンプラザ 2013年12月9日

会長時間

理事会報告



青木 秀行 会員

卓話

年次総会



私が感じた小さな優しさ体験談

中井 克洋 会員

最近感じた人の優しさのエピソードを2つご紹介します。

まず1つめですが、ついこの前の話です。私が朝出勤して、事務所のあるビルの1階でエレベーターを待っていた時のことです。

他の職場の人たちも5、6人いましたが、その中の一人が私の事務所の若い人だと思ったので肩を叩いて

「おはよう。」と声を掛けました。

ところが振り向いてみると人違いでした。想像していただければわかってもらえると思いますが、こちらでも気恥ずかしいし、向こうもきょとんとした顔をしていました。周りの人も、「ああやっちゃったな。」という感じで、何となく気まずい雰囲気その場の全員を包んだように思いました。

ところがです、私が間違った相手の人が私の方を振り向いて「私は誰かに似てましたか」といつてきたのです。それで私も、「ええそうなんです。」と答えて私の気恥ずかしい気持ちが消えました。周りの人も変な感じから解き放たれて、「見事な切り返しだなあ。」という感心したような雰囲気になりました。

もしその人の簡単な一言が無かったら、私は気恥ずかしいままエレベーターの中を過ごしたでしょう。またそんなことは仕事が始まるとすぐに忘れたと思います。ところがその一言のおかげで私はその日一日、なんとなく気分よく過ごすことが出来ましたし、今でもその事を思い出すと心が和やかになります。

似たような事があれば私もそのようにを掛けていこうと思います。それがひとつめの小さな優しさです。

ふたつめですが皆様もご存じのように、私はこの6月に入院しました。私の高校時代の同級生が院長をやっている病院で定期検査に引っかかり、別の病院に紹介されて手術をしてもらいました。その別の病院でも同級生が内科の部長をやっていました。彼らやそのほかにも何人かの同級生の医者にもいろいろ相談しました。

主治医は手術してくれた外科の先生でした。もちろんその先生は検査結果や術後の見通しとリスクをしっかりと説明してくれました。

ところで途中で気づいたのですが、私が相談した友人の医者何人かは私の相談に対して「大丈夫か」ではなく、「きっと、大丈夫だよ」と言ってくれました。最初は「自分が診てもいないのに、プロのくせによく大丈夫だっていうよな。」思いました。

しかし次第に手術が近くなったときや、手術が終わってその術後の検査結果が出るまでの不安な間に、彼らの「きっと、大丈夫だよ」という言葉にはとても勇気づけられました。これに対してプロではない人たちはお見舞いなどにきてくれても、私の悪い顔色や体



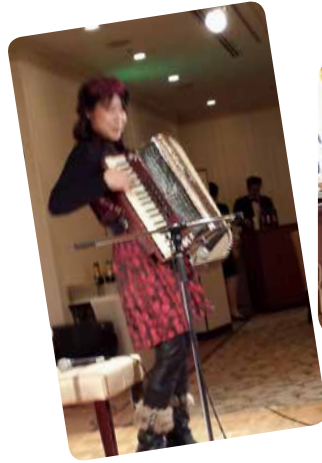
重が減ったことをみて「大丈夫か」「顔色が悪い」「すごく痩せたな」などと心配してくれるのですが、全然うれしくありません。

考えてみれば、心配しようがすまいが、神様だけが知っている客観的な結果や未来はもう決まっているわけです。精神衛生でいうと、根拠のないことであっても場合によっては元気づける方向の話をした方がいいに決まっています。

もちろんリスクを説明しなければならない主治医は別ですが、責任をとる立場でなければ、プロであっても、いやプロだからこそ前向きな方向での説明をしたほうがよいのだと思いました。

私も法律のプロですが、責任のない立場であれば今回の医者の方々と同じように励ました方がよい場合があるのだと勉強になりました。その意味で今回の友人たちの親切はとても勉強になりました。

クリスマス夜間例会
リーガロイヤルホテル広島 32 階



卓 話

フルートとピアノ演奏



演奏

フルート/沖本 志帆様 ピアノ/吉田 仁美様

今後の奉仕活動予定

- ◆ 2014年2月23日(日) 午前9:00～
御手洗川清掃
- ◆ 2014年6月29日(日)
薬物乱用防止街頭キャンペーン